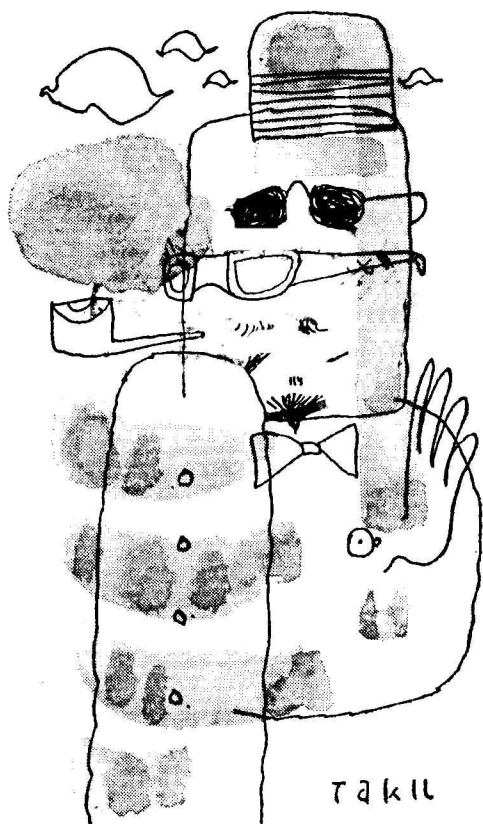


男性作法

江國滋著

男性作法

江國滋 著



すまいの研究社

昭和四十六年八月二十日第一刷発行

◎著者 江國 滋

発行者 米倉 明

装釘・カット 秋野卓美

男性作法

発行所 株式会社すまいの研究社

東京都中央区日本橋江戸橋三の七

アミノ酸会館八階

☎ 03—二七四—二九三一—四

振替口座 東京六八八一七番

印刷 凸版印刷株式会社

製本

定価 五八〇円

0095-0103-3719

作法？

俺が作法や——*Amart von Klee*

男性作法／目次

I

△作法とは▽	お立会い、血止めはないか	11
△年賀状その他▽	拝啓陳者……	18
△新・電話心得▽	失礼な利器	24
△敬語▽	そんなにむずかしいか	30
△自動車の乗り方▽	後部シートに貴賤ありや	37
△目のやり場▽	弁天様が鎮座します	43
△接吻作法▽	時のはずみ	49
△結婚シーズン▽	だっこすりゃおんぶ	55

△白昼の無礼(1)△ いいがかりのつけ方 62

△白昼の無礼(2)△ 大の無礼小の無礼 68

II

△礼服△ なかなか買えないもの 77

△胸のハンカチ△ 十万円で洩^{はな}かめば 83

△めがねハント△ われは顔面扁平足 89

△サングラス考△ おてんとうさまのストライキ 95

△傘とレインコート△ 濡れていこう 101

△男の下着△ ステテコ大弁護 107

△中元大戦争△ セスナ機を買えない人に 113

△自動販売機△ 賛成論兼反対論 119

△買ってはいけないもの△ 欲しけりや盗め 125

III

△食生活の知恵△ 我関セズ焉われかん えん 133

△さらばDK△ 食生活の敵 140

△日本茶△ まあお茶でも 146

△喫茶店心得△ いりびたつてはいけないよ 152

△献酬△ お流れ頂戴 158

△カクテルパーティー△ 序論のながい本論 64

△床の間△ 凹所願望ぼこしょ 170

△別荘△ 実益拒否 176

△マイホーム△ 幻の中流家庭 182

△非常持ち出し△ 持ち逃げ作法 189

IV

△長髪是非△ 黒髪は男の命、か 197

△ヒゲについて△ 有資格者は？ 203

△体育の日に△ 体力大作戦 210

△医者選び△ どこにいるのか主治医 216

△夏休みの過ごし方△ かえりなん、いざ 222

△ゴマのすり方△ お世辞の極意 229

△出張△ なにをあくせく 235

△社内麻雀△ デノミのすすめ 241

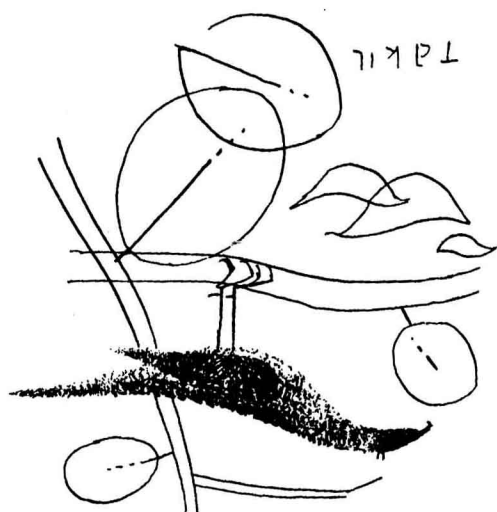
△かくし芸△ 忘年会恐怖症諸氏に 247

△出処進退△ 最後のエチケツト 253

あとがき 261

男性作法

江國
滋



I

お立会い、血止めはないか

——作法とは

1

たのしい文章を書きたいと思う。書けばよからう、と、そうあっさり片付けられては困る。タイトルに『男性作法』とうたうからには、たとえかようなものでもやっぱり作法書の一種にはちががなく、作法書となれば、どうしても無味乾燥な部分も含まざるを得ないから、たのしい文章にはなりにくいのである。

民のかまどのにぎわいをごらんになって「朕富めり」と仰せられたのは仁徳天皇で、その仁徳天皇を主神とする大阪・高津宮の広い石段をのぼりきったところに手水舎があつて、かたわらに「手水の使い方」と書かれた高札がたっている。その文章が、実にどうもたのしい文章だったの

で手帳に写してきた。

- 1 まず右手に柄杓ひしやくを持ち左手を洗います。
- 2 次に左手に柄杓を持ち右手を洗います。
- 3 次に右手に柄杓を持ち左手に水をうけて口をすすぎます。
- 4 終りに右手に柄杓を持ち左手をもう一度洗います。

これほど平明で、これほど過不足のない文章がまたとあろうか。次に左手に柄杓を持ち……と声を出して読むうちに、なんとなくなったのしくなってくる。谷崎潤一郎大文豪は名文の条件を論じて「隅から隅まで、はつきり行き届いてゐて、一点曖昧あいまいなところがなく、文字の使ひ方も正確なら、文法にも誤りがない」(『文章読本』)ことを一つの資格にかぞえておられたが、高津宮の高札は、まさしくその条件にぴったりの、当代の名文というべきであろう。終りに右手に柄杓を持ち左手を……こういう文章は、なかなか書けるものではない。

一体に、人間の動作を文字にあらわすことはむずかしい。手順を追って正確に記述するのは、書くほうではめんどくさいし、読むほうではわずらわしい。しかるに、作法書は動作の解説書である。作法を説く文章が、しばしば悪文に墮しやすいのはそのせいかもしれない。もっとも、悪

文には悪文の魅力がないこともない。大正七年発行の小冊子『是丈は心得おくべし』(誠文堂刊・定価六十銭)のなかに、西洋料理のマナーに触れた項目があつて、だいたいこんな調子で書かれている。

へ食ひ難い物の食ひ方　鳥は左の指で骨を押へ、ナイフを持つて骨から肉をはがしてから、ナブキンをもつて左手を拭ひ、改めて右手にフォークを持つて食ふ。

左手にナブキン右手にフォークとくれば、どうしたつて「田原坂」である。読みすすむうちに、右手に血刀左手に手綱ア馬ン上ゆウたかな美少年と鼻唄の一つもとびだす感じで、これまたたのしくなってくる。

たのしい文章を書きたいと思うけれども、思ふばかりで自信はない。ヘタな小細工はやめて、子供がつづり方を書くように自分の文章で書くにしくはない。すなわち、文は人なり、である、というのはまっ赤ないつわりで、何をかくそう、文は嘘なり、と力説してやまないのはわが尊敬する評論家の山本夏彦氏であつて、「人なり」も「嘘なり」も、それぞれ真実を穿っているように私には思える。

冠婚葬祭衣食住その他もろもろの作法について、以下、私なりの考えを開陳いたすにあたって、

文は人なり、ユメ疑うことなかれ。とはいうものの、文は嘘なり、だまされてはいけないよ。

2

正しい歩き方を、諸君、知っておられるか。頭のとっぺんに本を乗せて、^{たのみ}畳のへりの上をそりそり、というのは、あれは女子と小人のすることで、堂々たる紳士である貴君^{きくん}は、ちゃんと法にのっとりた歩き方をしなくてはいけない。そは、いかなる歩き方かというに、

へ歩き方へ 左足から歩きはじめるのが法である。

と、前掲の『是丈は心得おくべし』に出ている。どうして左足から歩きはじめなくてはいけないのか、そんなことは知らない。知らなくても法は法である。ただし、この文章には続きがあって「場合によつては、右足から歩きだしてもよろしい」というのだから、要するにどっちでもいいということだろう。

左足から歩こうが右足から歩こうが、たしかにどちらでもかまわないことにはちがいないが、理由はさておき「これが法である」と聞いた以上は、ついこだわりたくなるのもまた人情である。